

体という相反するもののせめぎあう、危ういバランスの上にある格闘の詩が「娼婦論」である。

それは取りも直さず、日常生活のなかで、意味をやり取りする「口語」を使い、詩作の上でそれに抗いながら、長い伝統の息づく「雅語」に生きて、詩の原理を求めようとする荒川洋治の痛々しい独自の詩論でもあると言えなくもない。

ポストコロナの 可能性としての 〈女子たち〉

デイストピアの〈女子たち〉(一)
吉屋信子『花物語』

池上貴子

はじめに

コロナ禍を境に、「女性活躍時代」という景気の良い言葉は姿をひそめ、自宅で豊かに過ごす「おうち生活」がもてはやされている。政府の方策の名残か、家電や洗剤のテレビコマーシャルでは、夫とキッチンに立つ妻、夫が妻に食事を作っている風景などを「新しい家族」として定着させようと躍起だ。

とはいえ、内閣府男女共同参画局が提出した二〇一六年度「社会生活基本調査」の分析結果によると、六歳未満の子どもをもつ夫婦でさえ、育児・家事関連のトータル時間は、女性四五四分、男性八三分と五倍の開きがあり、先進

国中でダントツの最低水準であった^①。ちなみに共働きの世帯でも「約八割の男性が家事を全く行っておらず、約七割の男性が育児を全く行っていない」そうだ。五年に一度の基本調査だが、二〇二〇年にこの長年続く不平等が解消されているとは誰も思わないだろう。

前回、これら状況を発生させ、終わりのなき運動をさせている〈呪い〉とは、種としての〈生産性〉を人間の根源に置く認識そのものであると述べた。生産性自体は否定すべきものではないものの、コロナ禍という、理不尽な危機的状況下に世界がおかれた時、生産性を軸とした人間の選別が起こり、同一化への圧力が生まれえないとはいえない。アントレが警告を発した全体主義的な運動は、国家のみならず小さな共同体にも起こり得ることだ。

しかしながら、生産性の呪いは根強い。最近話題になった、はらだ有彩のエッセイ『日本のヤバイ女の子』（柏書房）では、昔話の中に生産性中心の〈物語〉の型が表出している点を捉えている。その上ではらだがカウンターとして着目したのは、「かぐや姫」「虫愛づる姫君」達の「ヤバ」さである。結婚・立身出世という生産性へと囲い込もうとする〈物語〉という共同体にまつろわず、自由にふるまう「ヤバさ」こそが彼女たちの健全さであったと喝破し、時空を超えたエールを「女の子」たちに送っているのだ。

併せて、はらだの指摘は、「女性活躍時代」という言葉に透けて見える、旧制度的な共同体（国家）が期待する男女の権力関係を担保とした「生殖や労働といった生産性を基盤とする活躍」と、女性たちが望む「肯定し、肯定される共感性を基盤においた活躍」との明確なズレを浮き彫りにする。何度も言うが、種としての生産性が産業や文化などに浸透している状況自体は決して否定すべきものではない。しかし、日本において明治政府が殖産興業を国家プロジェクトに決定した結果、男は外で働き会社に尽くし、女は子を生み家内を守るというライフスタイルが推奨され、〈習慣〉という惰性の運動（ドウルーズ）となった例もある。やがてその殖産運動は、東亜共栄圏建設のための太平洋戦争開戦を睨んだ人口政策要綱の策定、すなわち〈産めよ殖やせよ〉という人間の殖産へと堕したのである。

「二夫婦の出生数平均五児」、「健全なる家族制度の維持強化」、「女子の被傭者^{ひようしゃ}としての就業に就きては二十歳を越ゆる者の就業を可成抑制する方針を採る」、「優生思想の普及を図り、国民優生法の強化徹底を期すること」、そして高等女学校や女子青年学校における「健全な母性の育成」。これら今ではクレイジーにみえる人口政策要綱が想定するのは、戦争を目前にした大日本帝国が夢見たユートピアのシステムだったが、同時にそれは〈女子たち〉にとって人間